

第255回

林明夫の歩きながら考える

21世紀の地球社会

学習塾・予備校・私立学校・日本語学校でも、ビブリオバトルで、読解力の育成を！

―公益財団法人文字・活字文化推進機構で考える―

――「ビブリオバトル」とは何ですか。

(1)「おすすめする本を紹介し、どの本が一番読みたくなったかを決めるゲーム」。

(2) 全国各地の小学校、中学校、高校、大学、公共図書館、書店などで大流行中です。例えば、東京都墨田区などでは、すべての公立 小・中学校で、「ビブリオバトル」を行い、区のチャンピオン大会まで行っているようです。

(3)各学校や大学、公共図書館、公益財団法人文字活字文化推進機構、読売新聞社、書店組 合、出版社はじめ、多くの団体が推進、国民的な「読書推進活動」になりつつあります。

(4)これからは、われわれ、学習塾・予備校・私立学校・日本語学校でも、どんどん取り入れ、「読書推進活動」、特に、「読解力」の育成に役立てることを、ご提案します。

――例えばどのようにやればよいのですか。

(1)公益財団法人文字活字文化推進機構のウェブサイトや、近くの公共図書館のウェブサイトで、「ビブリオバトル」を検索すれば、すぐわかります。

(2)たとえば、「ビブリオバトルの出場者」を何人か募集（5～6名）。

(3)次に、出場者は、「みんなにおすすめしたい本、紹介したい本」を1冊選び、5分間、「何も見ないで紹介する」。その直後、2分位、質疑応答。○紹介の時間は、「小学生は3分」「中学生以上は5分間」。

(4)「出場者のお話」が終わったら、出場者全員への質疑応答を、数分間行う。

(5)最後に、「お話を聞いて、どの本を一番読みたくなったか、一人一票で投票」。「発表者は、自分で発表した以外の本に投票」。その日の「チャンピオン」を決める。

(6)主催者に予算があるようでしたら、「チャンピオン」に５００円分の「図書カード」など をプレゼントすれば、励みになると考えます。

――「ビブリオバトル」は何に役立つと考えますか。

(1)「どんな本を読んだらよいか」、「本を選ぶ」のに役立ちます。

(2)「ビブリオバトル」でおすすめいただいた本で、自分も読んでみたいなという本があったら、書店や図書館に行き探し出し、実際に読んでみることをおすすめします。

(3)「本に出合う選択肢」を「多様にする」「広げる」のに「ビブリオバトル」は役立ちます。

(4)図書館は、本を購入し、図書館の本を充実させるのに役立ちます。

(5)本屋さんは、本を仕入れ、書店を充実させるのに役立ちます。

(6)先生方や保護者の皆様は、子どもたちにお勧めする本を知るのに役立ちます。

(7)「ビブリオバトルに参加する皆様」は、「自分ですいせんしたい本」を「深く読み」、「自分のことばでいう（表現・説明する）力」を身に着けるのに役立ちます。

(8)読書により得られるものは「思慮深さ」「省察（自分を振り返る）力」と考えます。

(9)本好き、読書好きになります。

(10)みんなの前で、自分のことばで発表した本は、しっかり保存、繰り返し読み直せば、自分の人格の基礎の一部になります。

(11)みんなの前で、発表する力が身に着きます。ビブリオバトルは、みんなの前で、自分の考えを発表する、素晴らしい訓練となります。

(12)気に入った文章を紹介するには、「朗読」の仕方を学ぶと効果的です。

○「ビブリオバトル」と「朗読」をセットで行う「読書推進活動」にご挑戦ください。

○「公益財団法人文字活字文化推進機構」では「朗読者の養成と派遣」を行い、好評です。

――学習塾・予備校・私立学校・日本語学校の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

(1)現代の教育に最も必要なのは「読解力」です。

(2)この「読解力」を身に着ける最も確実な方法とは、①「辞書の活用」②「新聞を毎日読むこと」③「読書に励むこと」④「図書館を活用すること」。この四つです。

(3)1冊でも多く、じっくり本を読み、読解力を身に着けることは、「学校成績大幅アップ」「小学校・中学校・高校入試、大学・大学院入試まで、すべての受験勉強」の「基本のキ」です。読解力なくして、学校教科書・参考書の正確な理解はありえません。長文化する入試問題文を、試験時間内に正確に読み解き、正解を導くことはできません。

(4)学習塾・予備校・私立学校こそ、「ビブリオバトル」を活用し、「読解力」養成。

独自のカリキュラムに組み入れることをおすすめいたします。

(5)日本語能力検定試験2級(N2)は、「日本語を読み解く力」「日本語の読解力」が求められます。「N2合格」にふさわしい「おすすめ本」を紹介する「日本語学校としてのビブリオバトル」にもご挑戦を。

(6)日本語を学ぶ日本語学校の留学生や、在留外国の皆様に一番お薦めは、公共図書館にたくさん整備されている「小学校の学年別図書コーナー」や「ヤングアダルト・YA:図書コーナー」の本です。

(8)「YAコーナー」は、中学生に超おすすめです。

――今月も、僭越ではありますが、何冊か本を紹介させていただきます。

(1)一冊目は、阿川尚之著「アメリカン・ロイヤーの誕生。ジョージタウン・ロー・スクール 留学記」(中公新書/中央公論新社、1996年10月25日刊)です。アメリカ名門ロースクール 出身のローヤーたちは、どのくらい学んでいるのかがよくわかります。自分が、ワシントンDCのジョージタウン大学ロースクールに留学しているような気分になりました。医学 部医学科や難関大学への受験指導をする先生方は、是非、ご一読下さい。将来、留学し、このような教育にも耐えられる人材の育成をお願いいたします。英語も含め「読解力」を鍛え抜かないと話にならないからです。英英辞典、英字新聞、英語雑誌、英語の読書は必須。

○本書(181~187ページ)で、「弁護士の守秘義務」を学ぶと、「弁護士など専門職に仕事 を依頼する時の基本的態度」、つまり、「仕事を依頼する時には、自分に不利なことこそ、包み隠さずお話しすることの大切さ」がよくわかります。

(2)二冊目は、坂本達哉著『『共感』の思想史、ヒューム、スミスから現代へ』(岩波新書/岩波書店、2026年4月17日刊)です。イギリスの思想家、トマス・ホッブス、デビット・ヒューム、アダム・スミスの「共感」の考えを理解することなしに「資本主義」の理 解なし。本来の資本主義の根底にあるのは「相手を思いやる」「共感」の思想です。

(3)三冊目は、池田幸弘著「自由・秩序・進歩、ハイエク『自由の条件』を読む」(慶応大学出版会、26年2月20日刊)です。現代の国際秩序の大混乱の原因は、政治や経済のリーダーの「自由とは何か」の理解不足、勉強不足です。現在、世界の三大大国が「独裁国家」の様相を呈しています。今こそ、「ハイエク」の学び直しの時期と考えます。

(4)四冊目は、サマセットモーム著「月と六ペンス」(岩波文庫/岩波書店、1970年4月16日刊)です。ポール・ゴーギャンの生涯をテーマにした、モームの代表作。「月」とは、「手の届かないもの」、「六ペンス」とは「世俗的な取るに足らぬもの」を意味すると読後知り、「ああそうなのか」と納得。しみじみした作品です。是非、ご一読を。

(5)五冊目は、ペルー出身の大ベストセラー作家、イザベル・アジェンデ著「精霊たちの 家」(国書刊行会、89年12月11日)です。同著「エバ・ルーナ」、同著「エバ・ルーナのお 話」(白水社、22年10月15日刊)。同著・木村裕美訳「天使の運命 ㊤・㊦」(PHP研究所、04年3月17日刊)。モームの「月と六ペンス」の余韻に浸りながら読んだのが、アジェンデ作・木村裕美訳「天使の運命」。余りにも面白かったので、出世作「精霊たちの家」とその 続きの「エバ・ルーナ」「お話」を続けて読みました。アジェンデの作品はすべてつながっています。モームも、アジェンデも、一度読み始めたら、読み終えるまで本が手から離れ なくなる名作です。世界は広く、本格的な読書を目指す先生方には最適な本です。